

日仏関係と文化交流を考える

小林善彦

私の話は文化交流についてであります。全体を三つに分けて、第一に日本または日本文化はどの程度フランス、または広くヨーロッパに知られているかを、私の目で見たままに話したいと思います。その前提の上に立って第二に、文化交流について話したいと思います。そして最後に手短かに、日本におけるフランス、または日仏関係の発展について話いたします。

(1) 日本または日本文化はどの程度フランスに知られているか。

はじめて私がフランスに行きましたのは1953年から2年間、間もなく50年になります。その頃多くのフランス人には日本の存在もろくに知られていませんでした。私がパリで小さな部屋を借りて住んだ家主は両親を亡くした学生でしたが、「日本？ それはトルコよりこっちか、向こうか？」と質問しましたから、世界地図を開いて説明しなければなりません。当時、パリの日本人はわずかに約300人ほどでしたから、道で日本人らしい人に出会うと、「もしや、日本の方では？」と声をかけられ、「よろしかったら、その辺でお茶でも・・・」と誘われて、名刺をいただいたこともありました。現在そんなことをやっていたら、一日中お茶を飲まなければならないでしょう。もちろん円を外国のお金に替えることも許されていませんでしたから、観光旅行もできませんでした。

日本は戦争でアメリカの爆撃に逢い、大都市はもちろん中小都市にいたるまで焼け野原になって、戦争が終わったのが1945年ですから、やっと立ち直って家が建ち、ようやく着るものも食べるものも出回ったところで、まだ「低開発国」に分類されている頃ですから、フランスに行ってみると、見ることも聞くこともすべて、実に豊かな国だと思いました。もちろんフランスも戦争によって大きな損害を受け、国土は荒廃したのですけれども、なんといっても戦勝国であり、さらに世界中に植民地を持った国ですから、その上に立って人々は日本とは比較にならないほどの豊かでゆとりのある暮らしをしていました。ですから日本など存在感がなかったのです。

それでもパリの「東洋語学校」(現在はパリ第三大学)には日本語科があって、毎年数人程度の学生が登録していたのですが、日本語をものにできた学生はほとんどいません。日本語・日本文化に興味を持つ人は、いわば「変わり者」でした。わずかに1951年のヴェネチア映画祭で、黒沢明の「羅生門」が受賞して、パリの映画館で上映されていました。ただし、フィルム

を買いに写真屋へ行くと「そのカメラは日本製か。帰国のときには、私に売らないか」といわれたことが二、三度あります。日本のカメラが優秀なことは、プロにはすでに知られていたのです。それから時折り日本から偉い方々がやって来ると、かならずスイスの時計をお土産に買って帰るのですが、実はその頃すでに、国際試験では日本の時計がほとんど一位を占めていたのです。日本人がそれを知らずに、スイスの時計を有難がっているといつて、さる時計メーカーの人が口惜しがっていました。

かつて永井荷風がフランスを去るときに、涙を流して悲しんだことを、『ふらんす物語』で書いています。実際、留学生、画家、特派員、ビジネスマンで生涯に二度フランスへ行った人はまずありませんでした。ところが私は1968年の夏に2ヶ月間、ヨーロッパの七カ国を周るという幸運に恵まれました。ヨーロッパでも自動車産業の強力なドイツ、フランス、イタリアは別としても、自国の自動車産業がない国、たとえばベルギー、オランダ、スイスなどへ行くと、トヨタ、ホンダなど日本車が走っているのをときどき見かけました。またコペンハーゲンの目抜き通りには、ソニーの大きな広告がありました。つまりこの頃から日本の自動車や電機製品の輸出がはじまっていたようです。

70年代の後半、私がパリの国際大学都市の日本館の館長をしている頃になりますと、日本からの鉄鋼、自動車、電機などの輸出は大いに盛んになって、ヨーロッパでは自国の産業が押されてきたために、いわゆる貿易摩擦が起こり、日本は恐るべき競争相手と見なされるようになりました。これについて面白い話があります。我が家に招待されたフランスのある高級官僚は、日本の「どしゃぶり輸出」に批判的でしたが、そのあとで私が電気掃除機を買いたいというと、「それならナショナルがいい」とすすめて、あとから広告のチラシまで送ってくれたのでした。日本製品の質がよいことは、ほぼ一般の常識になったといえるでしょう。またパリでは「寅さん」の全作品を週変りで上映する映画館も出て来ました。そんなわけですから日本語科に登録する学生も数百人に急増し、それと平行してパリの日本人も2万人を超えました。第一次日本ブームの時代です。

日本は輸出によって世界征服をもくろむ国として、攻撃の対象になりながらも、製品の質のよさによってフランス人の関心を引きつけたようです。80年代に入ると、日本語をはじめめる学生は毎年1000人以上になり、教室に溢れた学生を前にして、先生はどうやって教えたらよいか困っていました。一方、朝と夕方の子供用の時間に、テレビで放映されるマンガの半分以上は、日本製のマンガや「変身もの」です。「ヘンシーン！」というのは「modificati-o-n!」となり、「セーラームーン」では出てくる主人公の名前や主題歌もフランス語になっています。パリには日本マンガの専門店さえあります。ついでにいうと、10年ぐらい前、ローマで見たテレビでは「子連れ狼」をイタリア語でやっており、侍がイタリア語を話して「ボンジョールノ、コーメヴァ」といっているのにはなんだか妙な気になりました。この時代は、日本を先端技術とその工業化にすぐれた強力な国として強い関心を持ちながらも、恐るべき競争相手として警戒していた時代といえましょう。

1995年5月にジャック・シラクが大統領になると、フランスの日本ブームはさらに盛んになります。なにしろシラクは来日40回の経歴の人で、大統領の立候補演説も箱根の旅館にこもって書いた人ですから、大変な日本びいきで、とりわけ彼の相撲好きは有名です。場所がはじまると駐日フランス大使は毎晩、相撲の勝敗の一覧表に決まり手をつけて直接、大統領府に送っているそうです。こんなわけですから、フランス人の日本に対する関心も一段と高まり、フランスの大学や研究機関で日本語、日本文化の学科のあるところは10を超えました。当然、日本研究者の数も増えています。毎年もっともすぐれた研究に与えられる「渋沢・クローデル賞」を見ても、「中世京都の都市計画」、「与謝野晶子研究」から「江戸期の四国巡礼」にいたるまで、いずれも学問的に質の高いものばかりです。日本文学の翻訳も毎月2～3点出ているようで、古典の翻訳はもちろん現代の作家、川端康成、三島由紀夫、大江健三郎をはじめ、日本の推理小説までフランス語に訳されています。さらに自然科学や技術の研究者で、フランスから日本に来る人も増えて、現在首都圏の大学や研究所で研究する若いフランス人の数は約120人います。

以上のように見てくると日仏関係は永い間、学術・文化および芸術の関係であったと思います。ところが、この10年ほどの間に目立つのは、学問・文化・芸術以外の領域で活躍するフランス人が増えたことです。サッカーの全日本監督のトルシエ氏、日産自動車のカルロス・ゴーン社長などはとくに有名ですが、いまや日本に進出しているフランス企業は500社に及び、フランスはアメリカについて対日投資では第2の国になり、ビジネスの面でもフランス人が大勢来るようになりました。そうなると日仏関係はもはやかつてのような学術・文化・芸術の関係だけではなく、経済交流が大きな部分を占めるようになったのです。そして人の往来が盛んになれば、当然ながら日本への関心もますます高まります。

とはいえ、日本のものならばなんでも評価するというのではなくて、ときには批判的なこともあります。たとえば、さきほど話したマンガの流行ですが、テレビに出る日本のマンガでは、いとも簡単に人の首を切ったり、血まみれになったりするので、子供に日本マンガを見せない母親の会ができたと聞きました。私もある国際会議に出たときに、フランスのテレビからインタビューを受けて、なぜ日本のテレビ・ドラマやマンガでは、残酷な殺人や血が流れるシーンが多いのかという、厳しい質問に出会ったことがあります。

以上見てきたことからいえるのは、日本とフランスの交流は、かつてはお互いにごく少数のエリートの間だけの話であったのが、いまは観光客だけでも毎年何十万人もフランスを訪れるのですから、広く大衆レベルで行なわれるようになったといえます。ところが、観光よりもう一步踏み込んだところで、数年前パリに日本文化会館ができたこともあって、フランス側の対日関心が盛り上がっているのに対して、日本側の対仏関心はいまひとつの感があります。その原因は、日本の多くの大学では、英語以外の第二外国語の教育をやめてしまったからでしょう。これはとんでもない誤りだと思います。

確かに英語はもっとも重要な外国語ですが、英語さえできれば世界に通じると思うのは間違

いです。私の狭い経験でも、たとえば大規模な国際会議では普通、英語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語の同時通訳がつくことが多いのですが、会議場の外で行なわれる打ち合わせ会などでは、同時通訳が付きません。そして誰かがフランス語ではじめると、一座は全部フランス語になってしまいます。そうなる英語しかできない日本の代表には、なにが起こっているのか分からなくなります。英語一辺倒のつけがまわってきたのです。いま日本に必要なのは、英語以外の外国語のできる人ではないかと思います。それから外国語だけではなくて、日本の歴史と文化についてよく知っておくことが重要です。われわれが外国へ行って人から聞かれるのは、日本についてですから、質問に答えられなければ相手に評価されないでしょう。

(2) 文化交流について。

文化交流ということば、あるいは考え方は、昔からあったわけではありません。おそらく20世紀後半、第二次大戦後の比較的新しいことではないかと思われます。しかし、外国文化に接して学ぶということは古くからありました。たとえば6世紀以来、日本は大陸から中国の文化を移入して学ぶところが大いにありました。仏教も儒教も漢字も朝鮮半島を經由して伝わり、有名な遣唐使には学問僧や留学生が同行して、毎回500人の人が唐を訪れています。もっともそのうち約4分の1以上の人は、途中で嵐のため海に沈んでしまうか、または南のどこかの国に流れ着いて、そこの住民に殺されるか、また無事に西安に着いても、唐の女性と結婚してそのまま住みついた者もいました。それでもなお唐へ渡って行ったのですから、よほど唐の文化に憧れていたに違いありません。

ヨーロッパ諸国もルネッサンス以来、一時忘れられていたギリシア・ローマの文化を再発見して学んでおります。ただこれらは外国語（漢文、ギリシア語、ラテン語）と外国の文化を学んで移入するのであって、自国の文化を相手に伝えるのではないのですから、文化交流というよりは直流というべきであって、交流するという考えはありませんでした。

近代国民国家の時代、とりわけ20世紀になりますと、自国のすぐれた文化を他国に示し、あるいは輸出することは「国威宣揚」と考えるようになり、各国の政府は「対外文化政策」を立てるようになり、文化を輸出することは自国の力を外国に示す宣伝として重要視するようになりました。この場合も交流ではなくて、一方的な輸出、宣伝でありました。このもっとも典型的な例はナチス・ドイツで、ゲッペルスを「宣伝大臣」にして、オリンピックさえも国家宣伝の場にしました。このオリンピック競技を撮った『民族の祭典』という映画があります。私は子どもの頃見て、大いに感激したのを覚えております。それを見ればスポーツの大会までもナチスの宣伝になった様子がよく分かります。

もうひとつ、いわゆる先進国の文明の光を遅れた国、後進国にもたらずのが「文明の使命」という考え方がありました。とりわけヨーロッパ人はキリスト教の国以外には文明はないと思っていましたから、アジア、アフリカ、アメリカの国々に、文明とともにキリスト教を伝えようとしてきました。この考え方はしばしば、植民地主義を肯定する論理として使われたのでした。

たとえば植民地にヨーロッパの人が来たおかげで、郵便、電信、鉄道、病院などができたのだという論法で、これほど（旧）植民地の人を怒らせる言い方はありません。日本では尊敬されて教科書にも載っていたシュバイツァー博士がいい例で、アフリカの人たちからは植民地主義者だとして、厳しく批判されています。

このような国民国家主義の行き着くところは、二度にわたる世界大戦でありました。第一次大戦ではヨーロッパの国、とりわけ戦場となったフランスとドイツでは、非常に多くの若者の命が失われ、国土の荒廃を招いたことへの反省から、諸国民の間の相互理解の必要が痛感され、国家の宣伝の道具ではない人間の交流、文化の交流があらためて考えられるようになりました。パリに国際大学都市ができたのも、その一環でした。すなわち、世界中から来る留学生のたんなる寄宿舎ではなくて、おたがいに知り合って友情を結ぶ場を作り、ふたたび戦争を起こさないようにするというのが、「大学都市の精神」です。またジュネーヴにできた国際連盟の事務次長として新渡戸稲造が、各国間の相互理解のために働いたのはこの頃でした。新渡戸の名前は日本では、五千円札ができるまではかならずしも知られていなかったのですが、私が1968年の夏にヨーロッパのいろいろな国を周ったときに、各地で年配の方が「ニトベの思い出話」を語るのを、感動とともにうかがうことができました。日本でも渋沢栄一とポール・クローデル駐日フランス大使らによって、日仏の学術・文化交流機関として財団法人日仏会館が設立されたのは1924年でした。

それにもかかわらずまた第二次大戦が起こり、今度はヨーロッパだけではなくてアジアの諸国、日本も多くの人命を失い、国土の荒廃を招きました。その反省から国連が創立され、とりわけUNESCOの設立により、世界各国の間の文化交流が大いに促進されました。現在なお文化交流を自国の国威発揚とする考え方がなくなったわけではありませんが、諸国民の間の相互理解と世界平和のための文化交流という考え方がますます強くなってきています。

またかつて文化交流はもっぱら政府の仕事でありましたが、年とともに民間団体、すなわち財団や企業その他の団体の主導によって行なわれるようになりました。いま申しました日仏会館は、もっとも古い財団のひとつですが、第二次大戦後になりますと、国際交流基金をはじめとする多くの財団、それにたとえば全国に49ある日仏協会なども、フランスとの人物交流、文化交流のための民間団体です。それから日本の都市とフランスの都市との間に姉妹関係を結んで、相互理解の努力をしています。

ところで、20世紀後半の特長は、物と人の移動がかつてないほど盛んになったことです。1930年代のフランスの社会学者のアンドレ・ジークフリードは、20世紀の特長は観光旅行だといっています。昔は宗教的な巡礼で旅行することはありましたけれども、見物のために旅行するということはありませんでした。

私をはじめヨーロッパへ行った頃は、国境に近づくといつの間にか列車はガラガラになってしまいました。それほど外国へ旅行する人が少なかったのです。しかし、現実には社会学者の予想をはるかに上回り、いまでは世界中の人々が世界中を旅行するようになりました。毎年

パリを訪れる観光客の数は6700万人もあって、フランスの人口5600万人よりも多いといわれています。パリのシャンゼリゼ大通りで写真をとると、画面に日本人が写るといった人があります。しかしどっちみち写る人の過半数は観光客であって、パリに住んでいる人たちではありません。私の場合、観光だけの目的ではありませんが、この20年間は毎年1回か2回ヨーロッパに行っています。またどの国でも企業は国際的展開をはかるようになりました。

そうなるともはやエリートだけの交流ではなくて、大衆レベルの交流の時代となり、普通の人が外国へ行って、普通の人と知り合う時代となったのです。その結果、諸国民の相互理解はますます必要になり、重要になりました。さらにテレビの発達は、お茶の間で外国文化に接することができるようになってきました。私は7～8年前ベルギーのリエージュ大学へ教えにいったとき、11月というのにもう気温は0度で寒く、もっぱらホテルに閉じこもって勉強するかテレビを見ていましたが、MTVでやっている歌はマドンナ、マイケル・ジャクソンそれにマライア・キャリーなどアメリカの歌で、しかも日本で流行っているのと同じ曲でした。夕方になればアニメは日本製で、外に出ればマクドナルドは若者で混雑していました。ようするに多少誇張していえば、どこの国でも同じものを食べて、同じ歌を聞いているのです。

ここにひとつの問題があります。世界中にいろいろな国の文化が乱れ飛ぶ状況になりますと、一体外国の文化が理解できるだろうかと考える人が出てきます。ついしばらく前、私の友人の鈴木道彦君がマルセル・プルーストの大長編『失われた時を求めて』のすばらしい翻訳を完成しました。ところが、フランスの「フィガロ」という新聞に、「失われた時」という題でつぎのような皮肉な批評が載りました。すなわち、訳者は大学の卒業論文でプルーストについて勉強し、その後も一生プルーストを研究しながら、70歳になってようやくこの難しい長編を翻訳した。しかし、この小説のなかで描かれている19世紀末のパリのサロンの人々の、繊細微妙な心の動きが、日本人に理解できるはずがない。思えば訳者の生涯は「失われた時」ではなかったか、という趣旨です。

これはいわゆる異文化不可知論であって、そんなことをいい出せば、外国人の日本研究者には日本文学のなかにある「わび」「さび」「幽玄」など分かるはずがないということになって、国際相互理解などまったく成り立たなくなります。しかし、フランス人だってすべての人がプルーストを理解しているわけではないし、日本人も全員がわび、さび、幽玄の境地に生きていくわけではありません。確かに、フランスで「日本」と称するものに出会うと、われわれが面食らうことがよくあります。先日もパリにお蕎麦屋ができたというので、連れられて行ったところ、フランス人のボーイさんが、皆忍者のいでたちをしてお蕎麦を運んでいるのにはびっくりしました。それにもかかわらず、外国の大学で俳句の話をすれば、かならず学生たちは「ハイク」と称する短い詩を作りはじめます。その「ハイク」にわびがないといって非難してはいけません。異文化の理解に対しては寛容でなければいけないと私は考えています。

外国人と付き合っ議論をすれば、おかしいと思ったり腹が立つことがよくあります。腹が立たないという人は、あえていえば国際交流には不向きです。しかしながら、本当に怒る人も

また国際交流の仕事をした方がよいと思います。現在の私の仕事は、東京の日仏会館でフランスとの文化交流をすることですが、私はむしろ日本人とフランス人の間に毎日起こる文化摩擦を楽しんでおります。

日本は6世紀の古代から中国、朝鮮の外国文化を移入し、16世紀以降はヨーロッパ文化に接し200年以上の鎖国が終わって1868年以後は、積極的に西欧文化を取り入れて近代化をはかりました。しかし文化の移入が多く、交流というよりは直流の傾向が強く、受信には熱心であっても発信が不十分でした。私の考えでは日本文化はひじょうに優れていて、外国人がそれを学べば面白いし、彼らの文化の反省には役に立つのですが、政府にも文化政策がなかったのは反省すべきだと思っています。また受信ばかりしていると、相手に合わすことにばかり気を使って、自らの考えを立てることができなくなります。国際的な場で、日本人はものを売るが顔がないとしばしば批評されているのもそのためでしょう。

また移入の経験からいえば、日本人が外国文化を学んだのは、自分たちのために自ら選んで移入したから近代化に成功したのであって、外国の命令で移入したからではありません。したがって、文化交流で重要なのは、お互いが協力してお互いのためになるように行なうことであって、一方が他方に押しついたり、押しつけられたりしてはならないことです。これは今後の交流でぜひ気をつけることだと私は思います。

(3) 日本におけるフランス

最後に日本におけるフランス、または日仏関係の変化について少し話して終わりたいと思います。永い間、日仏関係は学術、文化、芸術の関係でありました。いまでも多くの日本人は、フランスといえば芸術の国、ファッションの国、料理の国と思っています。それ自体間違いとは申しませんが、この20～30年間の変化は、フランスがアメリカに迫るほどの対日投資第二の国になったことです。東京の在日フランス商工会議所への加盟企業は500社に達して、いまや双方とも経済の緊密な関係を無視することができなくなりました。

なかでも有名なのは、日産自動車を立ち直らせたカルロス・ゴーン氏です。彼はサッカーのトルシエ監督と並んで、日本でよく知られたフランス人ですが、その成功の理由は誰にも分かりやすい明快な目標を立てて、それを徹底するデカルト主義者だからだという人があります。私もそう思いますが同時に、日本人の考え方をよく研究して、従業員が納得するような方法を採用したからだと思っています。つまり広い意味での日本文化を学んだからだと思っています。事実彼は日本文化には非常に興味があるとある場所で講演していました。

このように考えますと日本とフランスの関係が、かつてのようにエリートだけの学術・文化・芸術の関係ではなくて、大衆レベルの関係となり、経済的にも緊密な関係を持つようになったいま、ますます相互理解、そしてそのための文化交流が必要になったといえるのではないかと思います。今日ここにいらっしゃる皆さんも、文化交流、相互理解のためにぜひ働いて下さるようお願いいたします。